

# 過去を表す動詞形式

——英仏比較文法の試み——（その2）

梅原 大輔・柏岡 珠子  
杉浦 茂夫

## 承前と序

本論文は、「別の言語の文法形式を視点に置いて比較研究を行うことによって、一つの言語内だけで考察していたのでは気付かれないような事象を明らかにする」という観点から、英語とフランス語の動詞時制のうち、特に過去を表す形式を採り上げて、比較対照を試みようとするものである。本論文（その1）（『甲南女子大学研究紀要 第29号』（1993）所収）では、Conan Doyleの *The Adventures of Sherlock Holmes* の中から 'The Five Orange Pips' を選び、そのフランス語訳と対照した結果、376件の対応例を見いだした。その対応例の中で、英語の過去形に、フランス語の半過去形と単純過去形が対応している例が比較的多い（それぞれ101例と146例）ことが見いだされたが、分析の結果次のような事実が観察された。

1 フランス語の半過去形に対応するのは、状態表現（進行表現を含む）と習慣表現であり、そこに共通するのは「特定の出来事の不在」、つまり「特定の始まりと終わりを持たない過去の事態」ということである。

2 フランス語の単純過去形と複合過去形は、ふつうスタイルの相違として片付けられることが多いが、単純過去形は「客観的な過去の事実を時間を追って語るくんだり」に多く用いられ、複合過去形は、「会話部分のうち特に一人称や二人称を主語とする文」に使われることが多い。

以上の観察のうち、特に1から、「フランス語では出来事の特定性を時制という形で文法化しているのではないか」という仮説を提出した。以上の観察や仮定は、もとより、多くの他の事例によって、その正当性を確証されねばならないが、本論文(その2)では、さらに他のジャンルよりの資料を追加して探求を進めようと思う。

本稿の1では文体の異なるジャンルから資料を集めて分析し、それぞれの資料に特徴的な時制の用いられかたについて考察する。また2では英語とフランス語を比較する中で気づいた点を指摘したい。その際に、柏岡がマークしたフランス語の動詞形式に、杉浦が対応する英語例文を検討して取捨選択し<sup>1)</sup>、梅原が整理をした上で原稿を作成し、それを全員で討議するという形を採ったことを明らかにしておかねばならない。

なお、本稿(その2)の章・節の番号は(その1)のものから独立していることを付記しておく。

## 1 資料の分析

### 1. 1.

本節では次の資料を分析する。

Fitzgerald, F. S. K., *Tender is the Night*. Charles Scribner's Sons, 1934.  
Belfond, Pierre. (tr.) *Tendre est la nuit*. Le Livre de Poche, 1985.

文学作品の翻訳にはさまざまな方法があり得ると思う。各言語に固有の慣用表現は別として、比較的原典に忠実な逐語訳的なものから、文学的感興や物語りの流れを重視した翻案的なものまで、その種類は多い。また、一つの資料の中でも箇所によって変動があるわけで、一口でその翻訳の性格を特定することは困難であるが、この資料は後者の性質を色濃く帯びたものであると思う。その顕著な例を挙げてみよう。

- (1) “--And Lucky Dick can't be one of these clever men ; he must be less intact, even faintly destroyed. If life won't do it for him it's not a substitute to get a disease, or a broken heart, or an inferiority complex, though it'd be nice to build out some broken side till it was better than the original structure.” (p. 153)

(そして、ラッキー・ディックが、こんな調子のいい連中の一人であってはいけない。もっと無傷でなく、少しは壊されでもしなければならぬ。人生が彼のためにそうしてくれないと、病気になるとか、意気阻喪するとか、劣等感にとりつかれるとかいうことが現実になってしまう。もっとも、壊れた面は補修をして、もとの構造よりも立派なものになるようにすればよいのだろう。)

- (1)' — ... mais Dick-la-chance est incapable d'un tel exploit. Il ne sera jamais assez astucieux. Il faudrait qu'il soit moins intègre, qu'une petite fêlure le ronge doucement. Si la vie ne veut pas s'en charger, à quoi bon espérer qu'une maladie, une peine de cœur, un complexe d'infériorité puissent le faire pour elle ? Et pourtant ... Ce serait tellement agréable de reconstruire ce qui s'est fissuré, en l'améliorant même, qui sait ? (p. 188)

(だが、ラッキー・ディックにはあんなふうによくやれはしない。抜け目なさが足りないのだ。もっと清廉潔白でなくなり、小さな傷に少しづつ蝕まれてもなければいけない。もし人生がその役目を引き受けてくれないとしたら、病気や心の痛みや劣等感が人生のかわりにそうしてくれるだろうと期待して何になる？とはいえ…ひびの入ったものを作り直すのは、どんなに気分がいいだろう。ひょっとしたら、さらに良くすることまでできるかもしれないし。)

次の例は、厳密には誤訳と言うべきものである。物語りの進行に直接影響しない枝葉末節は切り捨てられたと言うべきであろうか。

(2) He returned home for a final year at Johns Hopkins, and took his degree. (p.152)

(彼はジョンズ・ホプキンス大学での最終学年のために帰国し、学位を得た。)

(2)' Revenu en Amérique l'année suivante, il avait poursuivi ses études à l'université Johns Hopkins. (p. 186)

(アメリカに翌年帰った彼は、ジョンズ・ホプキンス大学で勉強を続けた。)

英語の *for a final year* が、*l'année suivante* となっており、「学位の取得」に関しては仏訳では触れられていない。

以上のような箇所ばかりであるならば、この資料はあまり役に立たないように思えてくるが、次のような箇所もあって、対応例が皆無というわけではないのである。

(3) After the lectures at the university he used to argue this point with a young Romanian intellectual who reassured him: "There's no evidence that Goethe ever had a 'conflict' in the modern sense, or a man like Jung, for instance. You're not a romantic philosopher---you're a scientist. (p. 154)

(大学での講義の後、彼はこの点について若いルーマニア人のインテリとよく議論したが、その男は次のように言って彼を元気づけた。「たとえば、ゲーテが、現代的な意味で《矛盾》に悩んだ証拠はないし、ユングのような男もそうだ。君はロマンティックな哲学者ではない。科学者なのだ。…」)

(3) Il en discutait souvent, après les cours de l'université, avec un jeune intellectuel roumain, qui cherchait à le rassurer.

—Prenons Goethe, par exemple. Rien ne prouve qu'il ait souffert d'un "conflit" quelconque, au sens moderne du terme. Jung non plus. Tu n'es pas un philosophe romantique. Tu es un scientifique. (p. 189)

(大学での講義の後、彼はそのことについてよく若いルーマニア人のインテリと議論した。その男は彼を安心させようと、こんなことを言ったものだ。「ゲーテを例にとろう。彼が現代的な意味で何らかの《矛盾》に悩んだという証拠はない。ユングもだ、君はロマンチックな哲学者ではない。科学者なのだ」)

以上のような事情を考慮して、ここでは Part 1 (英語の原本で5 ページ分) に限って分析の対象とした。対応する例が62 例あり、それらを分類したところ次のような結果が得られた。

table 1

英 \ 仏	半過去	単純過去	複合過去	大過去	計
過去	36	7	7	5	55
過去進行		1			1
過去完了	1			5	6
計	37	8	7	10	62

一見して気がつくのは、英語の過去時制がフランス語で半過去に訳されている例が非常に多いことである。英語の対応例を持たないものも含めたフランス語の全例を見ても、単純過去が13例、複合過去が10例に対して、半過去が69例と圧倒的に多い。

*Tender is the Night* は三人称で語られている小説である。小説中の出来事と書き手にとっての現在の間には直接の関係がないのだから、複合過去の事例が少なくなるのは納得のできることである。複合過去が用いられている全

10例についてさらに詳しく調べてみると、そのうち9例までが主人公の語りを引用した会話文の中で使われているものであり、地の文で使われている例はわずかに1例だけだった。(その1)で取り上げた'Five Orange Pips'がWatsonによる一人称の語りであり、それゆえ地の文でも複合過去が多用されていたのと比べると対照的である。

では三人称の語りでありながら、半過去に比べて単純過去の例がずいぶん少ないのはなぜだろうか。例えば、'Five Orange Pips'の場合であれば単純過去は半過去を上回り使用数が最も多かったのである。

一つ考えられるのは、今回分析した部分が小説の冒頭であって、そのもっばらの役割が時代や主人公の背景を提示することにある、ということである。ここで小説の背景は時代的狀況や主人公の思考や行動の様式を通して語られており、出来事が次々と進行していくというような形では表されていない。このようなことを表現するのはもっばら半過去の役割であろう。

では実際に半過去が特徴的に使われていると思える部分を見てみよう。

(4) Switzerland **was** an island ... For once there seemed more intriguing strangers than sick ones in the cantons, but that had to be guessed at---the men who **whispered** in the little cafes of Berne and Geneva **were as likely** to be diamond salesmen or commercial travellers. However, no one **had missed** the long trains of blinded or one-legged men, or dying trunks, that **crossed** each other between the bright lakes of Constance and Neuchatel. (pp. 151-152)

(4) La Suisse **était** alors une île ... On **pouvait** croire, à première vue, qu'elle **abritait** plus de conspirateurs que de malades, mais cette impression **méritait** d'être examinée plus avant — car les hommes qui **parlaient** à voix basse, dans les petits cafés de Berne et de Genève, **pouvaient** être aussi bien de simples diamantaires ou des voyageurs de commerce. Quoi qu'il en soit, personne ne **pouvait**

prétendre ignorer les interminables trains de soldats aveugles, infirmes ou mourants, qui **se croisaient** sans cesse entre les lacs ensoleillés de Constance et de Neuchâtel. (pp. 185-186)

これは主人公 Richard Diver が1971年に初めてスイスにやってきたころのスイスの状況を描写した一節である。この中にはいくつかの出来事動詞が現われているが (whisper, cross), 特定の出来事に言及しているのではない。第一文 *Switzerland was an island* によって示される状況を補足するだけで、何らかの出来事が展開しているわけではないのである。この部分のフランス語訳(4)の中には原文に直接対応しないものも含めて8例の半過去が出ているが、複合過去や単純過去は一例も現われていない。

これに対して明らかに出来事が連続的に述べられている場面では単純過去を多く見ることができる。

- (5) In France, to his disgust, the work was executive rather than practical. In comparison he found time to complete the short textbook and assemble the material for his next venture. He returned to Zurich in the spring of 1919 discharged. (pp. 154-155)
- (5)' Le travail, plus administratif que pratique, l'**éccœura** vite. Pour se consoler, il **termina** le court essai qu'il avait en chantier, et **rassembla** une documentation pour un autre à venir. Il **regagna** Zurich, au printemps de 1919, après sa démobilisation. (pp. 189-190)

この部分には直接に対応しない表現が多いが、(5)'で太字で示した語が単純過去である。ここでは出来事が次々と継起しており、それゆえ単純過去が連続していることがよくわかる。

今回分析した部分では、(4)のように物語の背景状況を説明するところが多く、(5)'のように出来事を次々に述べていくようなところが少なかった。この

ような場面的特徴のために、単純過去に比べると半過去の使用数が多いという結果が得られたのだと考えられる。

## 1. 2.

本節では次の資料を分析する。

Julia Kristeva, *Le Language, cet inconnu* (1981) Edition du Seuil.

Anne M. Menke (tr.) *Language: The Unknown* (1989) Harvester: Wheatsheaf.

本書は学術書であり、言語の本質・構造を論じている部分は現在形が多いことが予想された。そこで、過去を表す形式が多いことを期待して、言語学史の部分から「インドの言語学」と題した章(原著 pp. 86-96, 訳書 pp. 82-92)を分析の対象としたが、いささか期待はずれであったことを認めねばならない。それは、特に後半の部分に、学説の引用が多く、過去を表す形式があまり使用されていないためである。翻訳はかなり逐語的であり、たとえば次のようにほとんどパラレルである。

(6) Cette langue **a cessé** d'être parlée au III<sup>e</sup> siècle avant notre ère et **a été remplacée** par le prakrit, (p. 87)

(6)' This language (=Sanskrit) **stopped** being spoken during the third century B. C. and **was replaced** with Prakrits. (p. 83)

しかし、常に上のようにパラレルであるわけではなく、次の例のように英語訳の方で時制のない形が用いられている場合もある。

(7) Le sens est établi par les interlocuteurs quand les facteurs de manifestation **ont été manifestés**. (p. 95)



(7)' Listeners get the meaning of the sentence *through the clear utterance of* (all) the words in it. (p. 91)

このような例はあるものの、大部分は(6)と(6)'のように原文に忠実であると認められる。しかし、全体として、例の数が少ないことが惜しまれるのである。

もう一つ指摘しておかねばならないことがある。我々の網の目にはかかってこないが、フランス語の現在形が、英語訳では過去形になっていることが多いということである。

(8) Cette théorie du sphota **trouve** son pendant dans la théorie de la *phrase*. (p. 93)

(8)' The theory of the sphota **found** its counterpart in the theory of the *sentence*. (p. 89)

(9) Bhartrhari **abandonne** ce point de vue morphologique et **esquisse** une théorie ... (p. 94)

(9)' Bhartrhari **abandoned** this morphological point of view and **outlined** a theory ... (p. 90)

(10) la linguistique indienne **s'approche** de ce que nous appelons aujourd'hui une *théorie de l'énonciation*. (p. 95)

(10)' ... Indian linguistics **approached** what we today call a *theory of the enunciation*. (p. 91)

(11) ... le problème du langage **prend** une situation clé, ... (p. 96)

(11)' ... the problem of language **took up** a key position, ... (p. 92)

以上4組の例ですべてを網羅したわけではなく、他にもこのような例が散見されるのである。英語にも、historical present という用法が存在するのであるから、英訳者には、これらを現在時制で翻訳する選択も残されていたはずと思われるが、彼女はなぜ過去形を選んだのであろうか。憶測の域を出ないが、次の理由のいずれか、あるいは両方が働いたのではないか。

1) 歴史的現在、口語的文体の特徴であるから、学術書にはふさわしくないと判断したのではないか。

2) インドの言語学に対する主観的な親近感に於て、原著者と翻訳者との間にずれがあったのではないか。<sup>2)</sup>

さて以上のようなことを踏まえたうえで、対応例と認められた37例の分析結果は次のようになった。

table 2

英 \ 仏	半過去	単純過去	複合過去	大過去	計
過去	16	1	14	1	31
過去完了					
現在完了					
計	16	1	19	1	37

全体のサンプル数が少ないながら目につくのは、フランス語で単純過去が使われている例が極端に少ないことであろう。英語に直接の対応例を持たないため上の表から除外されたものの中を見ても、単純過去はわずかにもう一例あるにすぎない。それに対して複合過去は半過去とほぼ同じ数が使われている。

この章は、インド言語学の歴史的展開を追った内容で、客観的な過去について述べた文章である。にもかかわらず単純過去の例がこのように少ないことは興味深い。例えば、先に挙げた(6)の例では、サンスクリットが話されなくなり、代わってプラクリットが話されるようになった、という客観的な事実を描写しているが、単純過去ではなく複合過去が用いられている。

このように複合過去が多用される理由として二つの可能性がある。一つ

は、(6)のような文で述べられている内容は、純粹に過去のことではなく、その出来事の結果が現在にも及んでいるという点で、書き手の現在と何らかの繋がりがある、という可能性である。二つ目の可能性は、この筆者が単に文のスタイルとして単純過去よりも複合過去の方を選んでいているということである。

複合過去が多用されている理由を確かめる上で、数少ない単純過去があえて使われている文脈を見ることにしたい。英語との対応例がある中で、フランス語で単純過去が使われている例は一例だけある。それはこの章の一番最後の段落に現われている。

(12) Nous n'**avons esquis**sé ici que quelques aspects de cette science complexe de la signification qui **fut élaborée** en Inde, et dans laquelle le problème du langage prend une situation clé, une place de charnière. (p. 96)

(12)' We **have only outlined** here a few aspects of the complex science of signification that **developed** in India, in which the problem of language took up a key position, a pivotal place. (p. 92)

(12)の二つ目の動詞 *fut élaborée* が単純過去である。この段落はここまでの議論をまとめる締めくくりの部分であり、書き手の現在に極めて密着している。最初の動詞は複合過去であるが、英語の訳文からもわかるように現在完了的な意味が強い。もしこの状況で *fut élaborée* という単純過去をも複合過去で表すと、二つの動詞の時間的な相違が形式上区別されなくなってしまう。逆にこの動詞を単純過去にすることによって、これを一つの完結した過去の出来事として捉えることができ、同じ段落の中の複合過去とのコントラストが明瞭になるという効果が得られる。実際、これと同じような内容の文であるにもかかわらず複合過去で表現されている次のような箇所がある。

(13) Des théories hautement élaborées du sens, du symbolisme, du sujet, **se sont alors développées**, dans lesquelles la science moderne du langage retrouve lentement son point de départ. (p. 87)

(13)' Very elaborate theories of meaning, symbolism, and the subject **were thus developed**: from these the modern science of language slowly found its starting point. (pp. 82-83)

このような例からも、(12)の単純過去がもっぱら同じ段階にある複合過去とのコントラストを意識して用いられたものであり、それ以外の部分では、筆者は単なる過去の客観的な事実を述べるのにも複合過去を選択している、と言えるのではないか。

### 1. 3.

本節では次の資料を分析する。

Ionel Jianou, *Rodin*. (Arted, Editions d'Art, Paris. 1970)

Kathleen Muston and Geoffrey Skelding (tr.) *Rodin*. (Arted, Editions d'Art, Paris. 1971)

上記の二書は、杉浦の友人、井土熊野医博が、パリのロダン博物館を訪問された際に購入されたものである。その中から、ロダンの青年期の生い立ちを語った部分(原著 pp. 30-39, 訳書 pp. 30-40)を分析の対象として選んだ。これは一般向けの平易な解説書で、過去を表す形式も多く、訳文もほぼ原文に忠実な逐語訳で、資料としては貴重なものと言えよう。

table 3

英 \ 仏	半過去	単純過去	複合過去	大過去	計
過去	86	58	11	2	157
過去進行	7				7
過去完了			1	5	6
現在				1	1
現在完了		1	7		8
計	93	59	19	8	179

対応する179例の分析結果は次のとおりであった。

半過去の例が多いのに加えて単純過去の例が多いことに気がつく。全体の三分の一近くも単純過去が使われているという割合は、先の二つの資料に比べると圧倒的に高いことがよくわかる。これは、この資料が非常に客観的な伝記的記述の文であり、話し手の意志が介入してくる余地が全くないためであろう。実際、複合過去が用いられている19例についてさらに詳しく調べてみると、13例がロダン自身の語りを引用した部分に現われているものであって、地の文で使われているのは6例だけであった。しかもその6例はなぜか全て、ある連続した二つの段落に集中して現われている。少し長い引用してみよう。

(14) Avidé d'apprendre, opiniâtre dans son travail, Rodin n'a pas **eu** un vrai maître pour diriger son éducation artistique. Ni Lecoq de Boisbaudran, ni Barye ne lui **ont montré** un intérêt particulier. Il **a profité** de leur enseignement en écoutant leurs propos, en tenant compte des corrections qu'ils faisaient des travaux de l'atelier. Mais il **a dû** résoudre tout seul ses problèmes, choisir ce qui lui convenait le mieux de leurs conseils.

Il **s'est présenté** à trois reprises aux concours d'admission à l'École Impériale Supérieure des Beaux-Arts et à chaque fois il **a été refusé**. On peut donc le considérer comme un autodidacte. (p. 35)

(14') Eager to learn, a dogged worker, Rodin never **had** a real master to direct his artistic education. Neither Lecoq de Boisbaudran nor Barye **showed** any particular interest in him. He **learned** from them by listening to their teaching and observing the corrections they made in the studio. But he **had to** solve his own problems and choose those parts of their advice that suited him best.

He **applied** three times for admission to the *Ecole Impériale Supér-*

*ieure des Beaux-Arts* and each time **failed**. He can therefore be regarded as self-taught. (p. 34-35)

この部分にだけ突然複合過去が現われる理由は何だろうか。これら6例の複合過去は、問題なく単純過去に置き換えられる。ただしニュアンスはいくらか異なる。地の文に単純過去が用いられている箇所では、伝記的な事実が時間の流れの中で次々に述べられ、話し手の存在は意識されない。ところが、複合過去は話し手の肉声を聞くような印象を与える。フランス人インフォーマントによると、(14)では、この資料の地の文としては珍しく複合過去で語られているため、注意を喚起され、話し手が力説しているような感じを受けたそうである。

この部分に集中して複合過去が使われている理由としては2つのことがあげられる。まず、ある幅を持った期間に関する事実をまとめて述べているため、継起する点的な出来事を記述する場合に比べて単純過去を使う必然性が少ないと言える。また、最後が *On peut donc le considérer comme un auto-didacte*. と話し手自身の判断で締めくくられていることから、この部分は主観性が強く、読者に直接語りかける手段として複合過去が選択されたとも考えられる。

さて(14)の部分を除いては、*Rodin* の中では単純過去の使われている例が多かった。その中でわれわれがもう一つ気づいたのは、段落の第一文に現われる単純過去の用例であった。次の文を見よう。

(15) L'hiver de 1870-1871 **fut** très dur. Dans Paris assiégé, le froid et la faim **faisaient** des ravages. Les Rodin **habitaient** rue des Saules, sur la butte Montmartre. Il n'y **avait** plus de travail pour les artistes et la misère **menaçait** le jeune ménage démuné. (p. 40)

(15') The winter of 1870-1871 **was** very harsh. During the siege of Paris, cold and hunger **caused** havoc. The Rodin family **lived** in the rue

des Saules up in Montmartre. There **was** no work for artist and the young couple, deprived of a livelihood, **were threatened** with starvation. (p. 39)

第一文では状態動詞が単純過去で用いられているが、それに続く4つの動詞はいずれも半過去である。*L'hiver de 1870-1871 fut très dur.* という文は1870-1871 という限定を受けているため特定の閉じた時間に言及しており、従って単純過去が用いられていることがわかる。単純過去は過去の事態を一つの完結した固まりとして表し、話し手の視点はその外部にある。この段階ではまず最初に単純過去の第一文で1870年から1871年の冬について結論を述べるような形で言い切っており、そのあとその閉じた時間の内部に視点を移動させるようにして半過去によって状況の描写を付け加えている。

## 2. 英語とフランス語を比較して： 否定文の出来事について

否定文は出来事や状態の不在を表す文であり、特定の出来事を指し示す文ではない。例えば、英語で時の前置詞 *until* と *by* の使い分けを考えてみよう。*until* の句が修飾する述語は継続的な意味を持つものに限られるのに対し、*by* の句が修飾する述語は出来事を表していなければならない<sup>(16)</sup>。しかし、出来事述語の文でも否定文であれば *until* と共起することができるようになる<sup>(17)</sup>。

(16) a. John will arrive by noon.

b.\* John will arrive until noon.

(17) John will not arrive until noon.

(17)では否定文によって not arrive という状態が表されることになり、従っ

て *until* と共起することが可能になっている。

フランス語の半過去が出来事の不在を表すものであるなら、一般的に否定の文脈の中には述語のタイプを問わず半過去が現われるのではないかと予測できる。しかしながら、実際にはこの予測は正しくない。

以下はいずれも *Rodin* からの例である。

(18) Il ne lui **fut rattaché** officiellement qu'en 1724, mais depuis toujours son destin fut lié à celui de Paris. (p. 30)

(18') It did not **become** part of the city until 1724, but its fate has always been bound up with that of Paris. (p. 30)

(19) Rodin **ne cessait** d'étudier la sculpture. (p. 36)

(19') Rodin **never ceased** studying sculpture. (p. 36)

(18)では(17)とよく似た文脈であるにもかかわらず単純過去が用いられている。(19)では半過去が用いられているが、これは否定文だから半過去が用いられているというより、「何度も彫刻をやめる可能性はあったのだがやめなかった」、というような複数性を表しているためだと考えられる。一般的に言って、フランス語では否定文と半過去の間には対応関係が見られないばかりか、むしろ半過去を使うと不自然になったり特殊な解釈が必要になったりするようだ。この否定文と出来事の特定性の問題については(その3)以後で更に詳しく取り上げたい。

### 3 ま と め

本論ではまずはじめに3つの文献をもとに英語とフランス語の時制にどのような対応関係があるかを調べた。3つの文献はいずれも3人称で語られるスタイルであったが、実際に使用されている時制のうちわけは、それぞれか



なり異なる傾向を示していた。

*Tender is the Night* のフランス語訳には半過去が多用されていたが、これは小説の冒頭という文脈的特徴によるもので、物語の背景状況を描写するためと考えられた。

*Le language* は学術的な文献であったが、過去の客観的な出来事を表すのにもほぼ全面的に複合過去が用いられていた。

*Rodin* は筆者の主観が最も入り込みにくい内容であり、客観的な伝記的事実を述べるために単純過去が多く使われていた。

これら3つの資料は最初からそのように意図して選んだものではなかったのだが、結果として、それぞれの文献の性格が時制の使い方に反映していることがかなりはっきりと示されたと思う。

また同時に今回の分析を通じてわかったのは、時制の持つ談話的な意義である。たとえばフランス語の中で単純過去の連続の中に突然異質な複合過去を持ち込むことで、読者の注意を強く引きつけるといった談話的效果が得られる例を見たが、そのような効果は過去形の種類が少ない英語では表すことができない。時制の問題は一つの文の中だけでは十分に捉えきれるものではなく、談話のレベルをも射程とする必要のあることがわかる。この点についても（その3）以降の研究課題としたい。

#### 注

- 1) 取捨選択の方法については（その1）の1.1.を参照されたい。なお、本稿の各章においても、資料の性質を論じる際に、問題となりそうな例については触れることにしたい。
- 2) 次節で紹介する *Rodin* の中にも、*L'Homme au nez cassé, ... est le premier ouvrage important de Rodin.* に対して、*Man with the Broken Nose, ... was Rodin's first major work.* とあり、訳者の個性だけにその理由を求めることは困難であるかもしれない。